

## 上空から眺めた吉野川流域の構造物

2008年6月27日(金)に、国土交通省四国地方整備局が所有する防災ヘリコプター「愛らんど号」(写真1)に搭乗して、吉野川流域と那賀川流域を視察する機会を得ました。ここでは上空から眺めた吉野川流域に点在する土木構造物をご紹介します。

まずは、『吉野川橋』(写真2)です。右が河口側、左が上流側になります。増田淳氏の手による橋梁であり、完成当時は東洋一の長大橋でした。詳細は「土木紀行」No.17をご覧下さい。上空から見ると17連のトラスが非常に印象的です。

続いては、『第十堰』(写真3)です。吉野川河口から14kmの地点にあります。「第十」とは地名であり、「十番目の堰」ではありません。「第十」の由来は諸説ありますが、その一つに、この周辺で盛んに栽培されていた「大豆」からきたものだという説(徳島県立博物館に奈良東大寺に伝わる莊園の古い地図の複製が2枚展示されており、一枚の上部に吉野川らしい川が“大川”と表示され、その下部に“大豆処”と書き込まれている)があります。

第十堰の上流には『第十樋門』(写真4)という、平常時のみ旧吉野川に導水するための施設があります。この第十樋門は大正12年に竣工しており、現在も旧吉野川流域の洪水氾濫防止、河川維持用水、各種用水の供給に重要な役割を担っています。

写真5に示したのは、『西条大橋』で2004年3月に竣工した吉野川で最も新しい橋の1つです。写真から分かるように付近は砂州が発達しており、流路にあたる部分は流水の妨げとならないように、径間を大きく取った構造(アーチ橋)となっています。吉野川にはこのような、異なる径間を持った橋が数多く見られ、現在工事中の東環状大橋(写真6)もその1つです。東環状大橋は、吉野川河口部に位置する吉野川河口干潟の環境を保全するために、干潟のある右岸側を「ケーブル・イグレット」と呼ばれる新しい構造形式(ケーブルトラスの1種)を採用し、長い径間を確保しています。4年後の2012年完成の予定です。



写真1 愛らんど号



写真2 吉野川大橋



写真3 第十堰



写真4 第十樋門



写真5 西条大橋



写真6 建設中の東環状大橋と吉野川河口干潟

吉野川を遡ってゆくと、岩津という場所があります。ここは池田下流で吉野川が最も狭まる場所で、川幅は 170m しかありません。南岸には山が迫り、洪水の逃げ場がないため、氾濫しやすく、治水上の基準点となっています。この岩津に架かるのが全国でも珍しいデザインの片つり斜張橋である『岩津橋』(写真7)です。北岸にある高さ 55m の主塔から伸びた合計 12 本のケーブルが橋を支えています。全長は 175m、幅 10.25m です。完成は 1994 年です。

岩津から更に遡ると、池田ダム(写真8)があります。吉野川本流にある最も下流側のダムであり、香川用水や吉野川北岸用水の水源という重要な役割を担っています。

池田ダム湖には、写真9に示す『池田へそっ湖大橋(徳島自動車道)』が架かっています。全長 705m、幅 9m、湖面からの高さは最大 60m のコンクリートアーチ橋です。2000 年に完成しました。

橋梁を中心見てきましたが、吉野川には古い橋から新しい橋まで、非常に多くの橋が存在します。古い橋の代表が最後に紹介する写真10の『かずら橋』でしょう。この橋は日本三大奇橋の1つに数えられています(残りは「錦帯橋」(山口)、「猿橋」(山梨)。ただし諸説有り)。このかずら橋は、3 年に1度掛け替えられますので、本当の意味で古い橋ではありません。長さ 45m、幅 2m、谷からの高さ 14m です。この『かずら橋』は祖谷(いや)地区に多数あったそうで、1646 年の“阿波国図”には7つ存在したことが記録されています。

写真11は『かずら橋』のある善徳地区を写したものですが、同地区は吉野川流域でも有数の地滑り地帯となっています。

最後になりましたが防災ヘリ搭乗の機会を与えて下さいました四国地方整備局に御礼申しあげます。



写真7 岩津橋



写真8 池田ダム



写真9 池田へそっ湖大橋

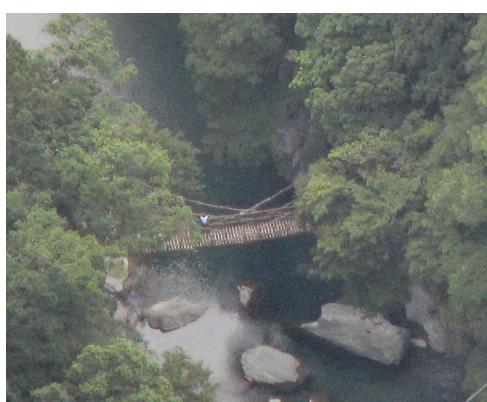


写真10 祖谷のかずら橋



写真11 善徳地区全景